

## 江南における桐城派の拡大 — 吳徳旋を中心にして

浅井邦昭

### はじめに

桐城派は姚門を中心として拡大し、姚鼐の弟子たちは、師の教えを各地に広めていった。例えば、京師では、梅曾亮が桐城古文を吹聴して、文壇の領袖となり、桐城では、方東樹が桐城の學術伝統を弟子に伝えた。また、姚鼐のように、姚鼐の弟子や再伝の弟子と広く交際し、京師と江南をつなぐ役割を果たした者もいた。姚鼐の死後も、弟子たちは同門意識を抱いて、各地に桐城派の核となるグループを形成したのである。

これまで、筆者は彼らが桐城派の形成に果たした役割について論じてきた<sup>1</sup>。今回取り上げる吳徳旋も、桐城派の形成に寄与した弟子のひとつである。吳徳旋、字は仲倫、宜興の人である。諸生のため幕僚などで生計を立てた。古文に関していえば、彼は二十六歳のとき、京師で張惠言、惲敬、王灼らと交遊を結び、たがいに文章を切磋琢磨している。また、四十歳前後には、姚鼐に師事を願ひ出て、古文の教えを受けた。その後、七十四歳で世を去るまで、姚鼐の弟子として、江南において大きな影響を与え続けたのである。その著作には『初月樓文鈔』『初月樓詩鈔』『初月樓聞見録』などがあるが、それ以外に、呂璜が編んだ『初月樓古文緒論』が、その文学主張を伝えている。

彼の名は、曾國藩「歐陽生文集序」(『曾文正公文集』卷一)に見え、早い段階から、桐城派の主要作者と見なされてきた。ただし、「歐陽生文集序」は、彼と呂璜が廣西に同調者を生んだ点にのみ注目

したため、曾國藩以降も、特に廣西への影響が重視されてきた。一方で、彼はいわゆる「陽湖派」の人々とも交遊があり、長く江浙を中心に活動していた。そのため、近年では、江南一帯の活動に注目して、彼が桐城派拡大に果たした役割についても、論じられるようになってきた<sup>2</sup>。

このように、姚鼐の教えは、吳徳旋にも受け継がれたが、その具体的な活動は、まだ十分に解明されていない。そこで、本稿では、姚鼐およびその弟子たちとの関係、陽湖派と呼ばれる人々との交遊、呂璜をはじめとする弟子への影響について論じていく。その上で、彼がどのような立場で、桐城派の拡大に貢献したか明らかにしたい。

### 一、姚鼐との師弟関係

吳徳旋は姚鼐に師事し、師の教えに心酔するようになった。そこで、本章では、彼と姚鼐がどのような師弟関係を結んだのか、その経緯について見ていくことにする。

乾隆四十年(一七七五)に江南へ帰ってから、姚鼐は各地の書院で山長を務め、その名を慕って後進が集まり、多くの弟子を持つに至った。吳徳旋「姚惜抱先生墓表」(『初月樓文續鈔』卷八)によれば、彼もまた二十代で、すでに姚鼐に弟子入りの希望を持っている。また、「古文辭類纂」を読み、古文の法について悟るところがあった。嘉慶

十二年(一八〇七)ごろには、吳徳旋は姚鼐に師事を願ひ出ており、彼もまた姚鼐を慕う後進のひとりとなすことができるのである。

ただし、吳徳旋は単なる後進ではなかつた。彼はすでに年を重ね、文学において十分な実績を積んでいたからである。姚椿「吳仲倫先生墓誌銘(并序)」(『晩學齋文集』卷八)は「乾隆の季年に當り、已に文學を以て海内を服す(當乾隆季年、已以文學服海内)」といい、吳徳旋の文名に言及している。乾隆末年といへば、張惠言らと交遊を結んで、しばらく経っており、このときには、すでに文壇の名士として遇されていたことがわかる。

その声望の高さは、姚鼐の書簡からも、うかがうことができる。「復吳仲倫書」(『惜抱軒文集後集』卷三)は、吳徳旋が師事を願ひ出たころの書簡と推測されるが、そこには当時のふたりの關係を読みとることができるといふ。

姚鼐頓首、仲倫先生足下。鼐才陋せま識聞くらく、古人の學に得る無けれども、而れども士大夫徒ただ故舊の好みを以て之れに與あするのみ。遂に横よしまに虚譽を竊ぬすむは、甚だ愧恥すべし。今ま先生又た過ち聽きて推し之れを及ぼして、之れを歐陽永叔に比するに至りては、是れ重ねて其の愧を益して之れをして答へと爲す所を知らざらしむ者なり。伏して賜示する文集を讀むに、理當りて格峻げげんしく、氣清らかにして辭雅なれば、今まの世固より未だ其の比なぶもの有らず。先生の希めがふ所の者は退之なり。退之に學ぶ者を以て之れを較ぶれば、蓋し李習之、持正と並ぶこと、言を待たざらん<sup>三</sup>。

姚鼐は文集に言及しており、吳徳旋が自作への批評を求めたのに対する返信であることがわかる。姚鼐は書中で「仲倫先生」と呼んでいる。このころ、姚鼐はすでに七十歳を超え、江南では文壇の泰斗と目

されていた。それなのに、吳徳旋を「先生」と呼ぶのは、彼の文名を承知していたからである。ここから、姚鼐も、はじめは彼を名士として遇したことがわかる。

さらに、この書簡では、たがいの作品に対する評価が示される。吳徳旋は姚鼐を歐陽修になぞらえたようである。姚鼐はその評価を固辭する一方で、彼の文章を当代では比類なきものとし、韓愈に学ぶ点では、李翱や皇甫湜にも匹敵すると賞賛している。このような絶賛は、世評だけでなく、姚鼐自身の高い評価を示すものであり、その作品が、姚鼐から一目置かれたことがうかがわれるのである。

こうしたやりとりを経て、彼は姚鼐への弟子入りがかたう。しかし、その教えは、彼が関心を持った古文の法ではなかつた。このとき、姚鼐からどのような教えを受けたのかは、「七家文鈔後序」(『初月樓文鈔』卷五)に詳しく見える。

先生之れに誨をへて曰く、子の文を論すること法に主となすは、是なり。然れども此れは學者の始めの事なり。其の終はるや、幾んど且またに法有るを知らざるも、而れども未だ始めて法に戻もどらざらん。子其れ歸りて之れを周秦諸子及び司馬子長の書に求めんかと。徳旋 唯唯然と曰ふも、固より且しかく之れを疑ふ。疑ふらく夫れ惜抱先生の文之れ法に謹むならんと。然れども先生固より嘗て之れを言ひて、文の至れる者は、造化の自然に通じ、人力の得て施さざるなりと曰へば、則ち夫の人力の爲すべき所と言ふ者も、亦た惟だ學者の始めの事なるのみ<sup>四</sup>。

先に見たように、吳徳旋は『古文辭類纂』を讀み、古文の法に悟るところがあつた。だからこそ、姚鼐に師事し、その詳細を知りたいと願つたのである。それに対して、姚鼐は、法が存在することを意識せ

ず、法から外れない高い境地を求めべきだと答える。さらに、法はあくまでも古文を学ぶ出発点であり、その到達点は人の力が及ばない造化の自然にあるという。この教えに対し、吳徳旋は疑問を持ちつつも、何とか理解しようと努力したのである。

このときのやりとりについては、前出「姚惜抱先生墓表」でも、姚鼐が文を禪で諭え、法外の意をくみ取することを求めたという。その答えに、吳徳旋は悟るものがあつた。このように、師から高遠な境地を授けられ、彼はその境地を会得したと自負していた。だからこそ、「而して先生も亦た深く徳旋を許して與に文を言ふべしと爲す（而先生亦深許徳旋爲可與言文）」とあるように、姚鼐は彼を高く評価したのである。もともと姚鼐は彼を名士として遇していた。さらにみずからの教えが理解されたことで、重要な弟子として位置づけるようになった。そのことは、「興陳碩士」（『惜抱先生尺牘』卷十六 十葉）において、姚鼐が「此の間、古文を作るものは荆溪の吳仲倫有りて、詩を作るものは江寧の管同有り（此間、作文有荆溪吳仲倫、作詩有江寧管同）」と吳徳旋の古文を管同の詩と並称していることからわかる。この吳徳旋の回想からは、師の特別待遇に対する感謝を読みとることができるのである。

次に、吳徳旋が姚鼐の教えをどのように受容したのかを見ていく。『初月樓聞見録』卷十では「嘗て古文の法を武進の張惠言臚文より受け、經義の法を族父の士模晉望より受け、詩の法を仁和の宋大樽左彝より受け、書の法を陽湖の錢伯坰魯斯より受く。後に皆な桐城の姚姫傳先生を以て宗と爲す（嘗受古文法於武進張惠言臚文、受經義法於族父士模晉望、受詩法於仁和宋大樽左彝、受書法於陽湖錢伯坰魯斯。後皆以桐城姚姫傳先生爲宗。）」として、自分の師承について概括している。古文は張惠言から、八股文は吳士模から、詩は宋大樽から、書は錢伯坰から、彼はそれぞれ法を授けられた。しかし、弟子入りしてか

らは、それまで受けた法より、姚鼐の教えを優先するようになる。つまり、彼が受容したのは、古文の法だけでなく、学問すべてに及び、その影響の大きさをうかがうことができるのである。

一方で、「擇古齋遺文序」（『初月樓文續鈔』卷三）に「刑部 徳旋と文を論ずるに、亦た間ま一二未だ合はざる者有り。而れども刑部爲る所の惜抱軒文集、徳旋固より敬愛して心に之れを儀とす（刑部與徳旋論文、亦間有一二未合者。而刑部所爲惜抱軒文集、徳旋固敬愛而心儀之。）」とあるように、その教えには、時に彼の文学主張と一致しないものも含まれていた。それでも、彼は『惜抱軒文集』に対する敬愛を失うことはなかった。それは、彼が姚鼐の忠実な弟子であろうとしたからであり、たがいの主張に多少の違いはあつても、師への尊崇は揺らぐことがなかったのである。

本章では、ふたりの関係についてを見てきた。吳徳旋は弟子入り前に一家の言を成していたため、姚鼐にはじめから高遠な教えを受けた。特別な教えを受けたことで、彼は姚鼐に心酔するようになったのである。莊仲方「吳君仲倫傳」（『初月樓遺編』卷末）によれば、姚鼐もまた「古文の眞傳、我之れを吳仲倫に授く（古文眞傳、我授之吳仲倫矣。）」といったとされ、眞伝を授けた弟子と見なしていた。これがまこと姚鼐の発言かは、さだかではない。しかし、吳徳旋の自負があつたからこそ、彼の周辺では、このような発言が伝えられたと考えられる。彼は師から受けた待遇を終生忘れず、忠実な弟子として、周囲にその教えを伝えようとしたのである。

## 二、姚門における吳徳旋の地位

前章では、吳徳旋と姚鼐の師弟関係について見てきた。彼は姚鼐から特別な教えを受けたと自負していたが、姚門の中心に位置したわけ

ではなかった。そこで、本章では主だった弟子との関係について見ていくことにする。

姚鼐の姪孫である姚瑩は、『姚氏先德傳』巻四において、姚鼐の弟子を列挙している。そのなかに吳徳旋の名も見えるが、姚椿、毛嶽生、張聰咸とともに私淑の弟子として扱われている。一方で、「與姚春木書」(『東溟文後集』巻六)において、姚瑩は「幸ひにして足下の異之、仲倫、生甫及び惜翁門下の諸君子との其の言を昌大するに頼りて、文章をして軌を正しからしめば、久しくして益ます昭明たり。盛んなりと謂ふべし(幸頼足下與異之、仲倫、生甫及び惜翁門下諸君子昌大其言、俾文章正軌、久益昭明。可謂盛矣。)」とっており、姚椿、吳徳旋、毛嶽生らを、管同と名を並べている。ここでは、著籍か私淑かは区別されていない。つまり、吳徳旋は私淑の弟子という位置づけながら、著籍の弟子と同じように、師の教えの継承者と見なされていたことがわかるのである。

『姚氏先德傳』に名の挙がった著籍の弟子のうち、吳徳旋には管同、梅曾亮、方東樹、陳用光らとの交遊が確認できる。そこで、以下に主だった弟子との交遊について見ていくことにする。

姚瑩については、『初月樓遺編』所収の王國棟の跋文は、姚瑩が『初月樓續文鈔』を刊行したことに言及する。一方、吳徳旋も彼のために「東槎紀略序」(『初月樓文續鈔』巻三)を執筆しており、ふたりに特に親しかつたと考えられる。ふたりが最も密接な関係にあった時期は、道光十二年(一八三二)前後である。この年、姚瑩は武進縣令になり、吳徳旋、毛嶽生、方東樹などを招いて、姚範と姚鼐の崇祀郷賢をおこなっている。このときには、安徽巡撫の鄧廷楨をはじめとして、多くの弟子がこの事業に関わった。崇祀郷賢に際して、毛嶽生は「姚先生墓誌銘」(『休復居文集』巻五)を執筆し、方東樹も「書惜抱先生墓誌後」(『攷槃集文録』巻五)を執筆している。吳徳旋もまた

前出「姚惜抱先生墓表」だけでなく、「姚薑塢先生墓表」(『初月樓文續鈔』巻八)も執筆しており、江南における姚門の結束を示す事業に参加することになった。

「姚惜抱先生墓表」は、姚瑩からの依頼によって執筆されたものである。吳徳旋は「先生既に歿すれども、言立ち以て世に垂れて行遠くするに足れば、徳旋の文に藉る所無からん。夫れ亦た是れを用つて以て仰止の忱を誌すのみ(先生既歿、而言立足以垂世行遠、無所藉于徳旋之文。夫亦用是以誌仰止之忱而已矣。)」という。自分が執筆するまでもないというのは、彼の謙遜であるが、その背後には、師の墓表執筆を依頼された喜びも示されている。姚瑩は曾祖父と族祖の墓表を彼に委ねるほど、その文才を高く評価しており、それが後に同門のよしみで『初月樓文續鈔』を刊行することにつながった。ここからは、彼のために、姚瑩が何かと便宜を図っていたことがうかがわれる。

この道光十二年には、陳用光が浙江學政に就任している。彼は姚門でも特に栄達した人物であり、多くの同門の弟子を引き立てている。吳徳旋もまた幕僚として浙江に移り住み、彼の下で主に文章の校勘に携わっていた。例えば、彼は陸隴其の『一隅集』を継ぐ八股文集を編纂したが、吳徳旋はそれに対して「續一隅集序」(『初月樓遺編』巻一)を執筆した。そのなかでは姚鼐からの師承にも言及し、師承を示すことで、陳用光に対する同門意識を示したのである。

また、「陳侍郎納被録序」(『初月樓遺編』巻二)には、陳用光がみずからの作品をまとめる暇がなく、吳徳旋が読む機会を得て、『納被録』としてまとめた経緯が示される。序文中では、姚鼐の筆記が経史子集すべてにわたることに言及した上で、その弟子である陳用光の作品について、次のようにいう。

先生の是の編に至りては、始め性道の説を述べ、後に乃ち推して

之れを廣むれば、則ち凡そ經傳訓詁、稗史雜記、故事遺聞、夫の時賢の撰述と、該録せざる靡ければ、以て遺忘に備へ暇日を遣る。後の學者をして、各おの性情の近き所に因りて資取せしめれば、則ち咸く以て助け有るべきなり<sup>五</sup>。

ここでは、性理の学説を基礎とした博覽強記に注目し、陳用光を評価している。これは姚鼐の筆記と共通する長所であり、彼が師の教えを正しく継承したことを示そうとした。このように、陳用光への評価では、たびたび姚鼐からの師承が言及される。ここに示される吳徳旋の意識は、自分が彼の幕僚ではあっても、共通する師を持つ同門であることを強調するものだったのである。

このころ、吳徳旋は方東樹とも出会っている。方東樹が毛嶽生にあてた「送毛生甫序」(『攷槃集文録』卷八)には、武進における出会いに言及している。

道光十三年、吾が友姚君石甫の武進官廨に客となる。武進に張君臯聞と曰ふ文家有るも、已に前に死すれば見ゆること及ばざるも、寶山の毛君生甫、宜興の吳君仲倫、吳江の吳君山子を識る。三子の文同じからざるも、之れを要するに、臯聞と相ひ上下せん<sup>六</sup>。

ここで、方東樹は、三人の文章を張惠言と甲乙つけがたいという。張惠言は、吳徳旋の親しい友人であり、吳育の師である。彼が当地の出身者であるため、方東樹はここで言及し、彼と近しい吳徳旋ら三人の名を挙げている。つまり、方東樹が張惠言に言及したのは、吳徳旋らとの関係を意識しており、それほど強い同門意識は示されていないのである。

管同の場合、「答劉廉方書二」(『初月樓遺編』卷一)において、吳徳旋は「管異之は則ち詩と文と並びに優る(管異之則詩與文並優)」という。管同は姚鼐に最も長く仕えた弟子のひとりであり、だからこそ吳徳旋もその詩文に敬意を示した。一方で、管同「與吳仲倫書」(『因寄軒文二集』卷三)にも、ふたりの関係をうかがうことができ。この書簡執筆のきっかけとなったのは、姚鼐「與王鐵夫書」(『惜抱軒文集後集』卷三)に対する陸繼輅の批判である。彼は姚鼐が王芑孫を褒めすぎだと批判し、吳徳旋は師のために弁明した。このやりとりは、陸繼輅「與吳仲倫書」(『崇百齋齋續集』卷三)や吳徳旋「書王惕甫文集」(『初月樓文鈔』卷一)などで確認できるが、管同は『崇百齋齋續集』を読んで、この論争を知り、姚鼐の書簡は老學者に対する気づかいで書かれたものであり、情理を備えていると主張した。その上で、陸繼輅の批判が的外れだとして、吳徳旋に「同生平 惕甫を識らず、兼ねて未だ祈孫に見えず。獨り足下と忝くも同門にして、使信往來すれば、敢へて書を以て辨ぜん。祈孫に見ゆる時、幸はくば即ち以て之れに告げよ(同生平不識惕甫、兼未見祈孫。獨與足下忝同門、使信往來、敢以書辨。見祈孫時、幸即以告之。)」といい、自分の見解を陸繼輅に伝えるよう依頼する。後に管同は陸繼輅とも交遊を持つようになるが、このときはまだ面識がなかったのである。

ここには、吳徳旋に対する同門意識が示されている。吳徳旋だけでなく、管同も陸繼輅の批判に対して弁明している。この行動はふたりに共通しており、ともに師に対する敬意の発露だといえる。管同の書簡は、吳徳旋に姚鼐の名譽を守るよう働きかけたものであり、ともに姚門の結束を高めようとする連帯意識が示されているのである。

最後に、梅曾亮との交遊を見る。彼は姚門でも最も若い世代に属するため、吳徳旋ともなかなか会う機会がなかった。「與陸祁孫書三」(『初月樓文鈔』卷二)において、吳徳旋は「梅葛君四月の中に北上

し、道き揚州に出づ。德旋 友人の家に於いて曾て一たび之れに見ゆれども、其の爲る所の文何如なるかを知らず。既に足下と相ひ伯仲すと云へば、則ち固より其の年を難じて甚だ畏るべし(梅葛君四月中北上、道出揚州。德旋於友人家曾一見之、不知其所爲文何如。既云與足下相伯仲、則固難其年而甚可畏矣。)とあり、梅曾亮とは揚州で面識があるが、文章は見たことがないという。さらに、その作品が陸繼輅と伯仲するという評判を聞いている。この書きぶりからは、同じ姚門でありながら、ふたりにほとんど接点がなく、相手に関する知識も乏しかったことがわかる。その点では、梅曾亮との交遊はかなり疎遠なものであったといえる。

その後のふたりについては、梅曾亮「位西詩言及管異之吳仲倫因復作二首」(『柏榭山房詩集』卷八)に見える。この詩は、邵懿辰の詩に触発されて、管同と吳德旋を懐かしんだものであり、その第二首で、吳德旋を次のように詠んでいる。

蕪城に一たび古儒生に遇ひ	蕪城一遇古儒生
別れて後聲名老いて更に成る	別後聲名老更成
嘗て文章を論ずるに淡泊に歸し	嘗論文章歸淡泊
卻つて門戸を標はし轉じて崢嶸たり	卻標門戶轉崢嶸
張暉に並驅するも能く孤り往き	並驅張暉能孤往
方姚に私淑して定評を待つ	私淑方姚待定評
聞くならく道山に赴きて今ま十載なりと	聞赴道山今十載
高懷未だ異時傾かざるを惜しむ	高懷惜未異時傾。

ここでは、揚州の一別以来、ふたりの接触がなかったことが示されている。一方で、梅曾亮は、吳德旋の名声は老いてさらに高くなったことを認めている。特に注目すべきは頸聯で、彼の文章を張惠言と暉

敬と比べる一方で、方苞や姚鼐に対する私淑にも言及している。張惠言らに言及したのは、吳德旋が彼らと親しい関係にあったからであるし、一方で、姚門における地位としては、『姚氏先德傳』と同じく、私淑の弟子として位置づけている。梅曾亮は、その高説を聞けなかったことを惜しんではいる。しかし、その同門意識はそれほど強調されず、むしろ張惠言らとの関係を重視していたことがわかるのである。

ここまで、姚鼐の弟子たちとの交遊について見てきた。その関係に親疎があるものの、主だった弟子とは広く交遊を結び、姚瑩や陳用光からのように、同門として援助を受けることもあった。弟子たちからは、時に私淑の弟子と見なされることもあるが、彼らに比べ、吳德旋の入門が遅く、師事した期間も短かったためだと考えられる。一方で、弟子たちは、その文章に対しては高い評価を与えていた。また、その評価には、方東樹や梅曾亮のように、張惠言や暉敬を引き合いに出したり、管同のように、陸繼輅との交遊に言及したりすることがある。張惠言らは陽湖派と目される人物であるが、いずれも吳德旋と親しい関係にあった。姚鼐の弟子たちは、彼らとの交遊を知っていたからこそ、そのことに言及したのである。張惠言らとの交遊は、吳德旋が桐城派拡大に果たした大きな貢献といえる。そこで、次章以降、陽湖派の人々との関係を考察していく。

### 三、李兆洛、暉敬、陸繼輅と桐城三祖

吳德旋は、同じ常州出身の張惠言、暉敬、陸繼輅、李兆洛らと親しく交わり、その弟子とも交遊を結んだ。彼らは後に陽湖派と呼ばれるが、その名は、張之洞『書目答問』卷四が、暉敬、張惠言、陸繼輅、董士錫、李兆洛を「陽湖派古文学家」とするのはじまる。これに対し、劉聲木『桐城文學淵源考』卷五では、王先謙、孫葆田、馬其昶

らの分類に言及しながら、『書目答問』を批判している。一方、曹虹『陽湖文派研究』（中華書局、一九九六）をはじめとして、現在では陽湖派を独立させた論考も多く見られ、桐城派との関係が論じられてきた<sup>七</sup>。そこで、本章と次章では、「陽湖派古文家」を取り上げ、その交遊や桐城三祖に対する態度を分析する。

「陽湖派古文家」のうち、李兆洛は『桐城文學淵源考』巻九に名が見え、劉聲木は、巻五に収録するほかの四人と異なる位置づけにしている。『桐城文學淵源考』は、彼が姚鼐に師事したとするが、李兆洛自身は、師事について何もいっていない。ただし、姚鼐の依頼による「姚姬傳先生惜抱軒書錄序」（『養一齋文集』巻二）や「桐城姚氏董塢惜抱兩先生傳」（『養一齋文集』巻十五）などでは、姚鼐に対する敬意が示されている。ほかにも、吳德旋の依頼により、その弟子の遺集である「程子香文續鈔序」（『吳耶溪遺文序』）とともに『養一齋文集』巻四）などを執筆している。また、梅曾亮にも「與李申者書」（『柏樹山房文集』巻二）などがあり、李兆洛には、姚門と近い関係にあったことを確認することができる。

彼の文学主張については、従来、駢文重視の態度が注目され、桐城派への対抗意識の表れだとされてきた。しかし、薛子衡「養一李先生行狀」（『養一齋文集』巻首）によれば、康紹鏞が『古文辭類纂』を校訂した際に、李兆洛は『駢體文鈔』を合刻している。ここから、『駢體文鈔』刊行の目的は、『古文辭類纂』を補完することにもあったと考えられる。さらに、彼が桐城三祖の文学主張を尊重したことは、『徐季雅文稿序』（『養一齋文集』巻四）に見え、「桐城の方氏苞曰く、孔子 易を繋けて言に序有り」と曰ひ、又た言に物有りと曰へば、文の愈いよ久しくして傳はること、未だ此れを越ゆる者有らざるなり（桐城方氏苞曰、孔子繋易曰言有序、又曰言有物、文之愈久而傳、未有越此者也）」と義法の定義に言及した上で、さらに文章に古今の違いが

ないという姚鼐の主張も引用している<sup>八</sup>。ここからは、李兆洛もまた桐城三祖の文学主張を尊重し、異を唱えていないことがわかるのである。

次に惲敬について見ていく。彼は若いころ吳德旋、張惠言、王灼らと交遊を結んだ。特に張惠言と密接な関係にあり、吳德旋「惲子居先生行狀」（『初月樓文鈔』巻八）では、惲敬が張惠言の死に際して、「吾れ向に多くは古文を作らざる所以は、臯文在るに有るなり。今臯文死すれば、吾れ當に力を併せて之れを爲るべし（吾向所以不多作古文者、有臯文在也。今臯文死、吾當并力爲之。）」と嘆き、古文に精進することを誓ったとする。次章で見ると、張惠言の古文は、劉大櫟を継承するものであった。ここからは、張惠言と惲敬のめざす古文が同じであったことがわかるのである。

一方で、彼は姚鼐とも交遊があった。姚鼐は「與惲子居」（『惜抱軒尺牘補編』巻一）において、その文章を「數文字を承示するに、皆な佳きこと甚し。今まの世那ぞ此の手筆を見ることを得ん。之れを古人に校ぶれば、當に尚ほ遜る處有るべきのみ（承示數文字、皆佳甚。今世那得見此手筆。校之古人、當尚有遜處耳。）」と評している。吳德旋と同じように、惲敬もまた姚鼐に自作を送って批評を求めた。ここからは、彼もその名声を慕った後進のひとりであることがうかがわれる。それに対し、姚鼐も当今まれに見る文章と賞賛しており、ふたりの文学的交流を確認することができる。

一方、彼には、姚鼐の弟子との交流がほとんど確認できない。吳德旋だけは、若いころからの友人であり、姉が惲氏に嫁いだ姻戚関係でもあったため、相手に対する多くの言及がある。ただし、たがいの文章に対しては、時にきびしい評価が見られる。その原因は、惲敬が吳德旋の文章を批判したことに始まる。「與沈問亭書」（『初月樓文續鈔』巻二）によれば、張惠言の推挽によって、吳德旋は常州文壇で名声を

得ることになる。ところが、張惠言の死後、その評判に陰りが見えるようになった。

編脩既に之れに歿し、後に惲大令子居、大ひに力を文章に肆す。其の文を論ずるや、歐陽永叔より下、均しく貶詞有り。德旋を以て文章の籙に登すべき者の若しと爲して亦た幸みを得るも、貶す所の列に與して、才弱しと曰ふ。大令の言も又た吾が郡の士人の取り信ずる所なり。故に比時 德旋の文を毀つ者も亦た十の六七なり<sup>九</sup>。

惲敬が「才弱」と評したことは、「上曹儷笙侍郎書」(『大雲山房文稿初集』卷三)に見える。彼の評価によって、常州文壇において吳德旋を批判する者が増えた。それに対して、吳德旋も「書大雲山房文稿」二篇(ともに『初月樓文鈔』卷一)や「與程子香論大雲山房文稿書」(『與王守靜論大雲山房文稿書』(ともに『初月樓文鈔』卷二)などで、彼に対する批判を展開した。現在、桐城派と陽湖派で生じた矛盾の根柢として、これらの文章を取り上げることが多い。ただし、陸繼輅は『合肥學舍札記』卷一「有心相難」で、吳德旋の批判は、難癖をつけたにすぎないという。つまり、ふたりの対立は、文学的立場の相異というより、感情のこじれによる部分が大きかったのである。

一方で、「送惲子居序」(『初月樓文鈔』卷三)において、吳德旋は「予の古文を爲るを學ぶに、子居、皐文の兩人を得て助けと爲す(予之學爲古文、得子居、皐文兩人爲助)。」といっており、惲敬からも古文を学んだことが記されている。また、前出「七家文鈔後序」では、方苞、劉大櫟、姚鼐、張惠言、惲敬の名を並べ、それぞれの長所を述べた上で、「我が朝の文を能くするを以て名ある者は數十家あれども、然れども能く此の五君子の上を踰ゆる者有る無し(我朝之以能文名者

數十家、然無有能踰此五君子之上者矣)。」としている。ここでは、惲敬を桐城三祖に匹敵する一流の作者と認めている。つまり、彼は感情的な批判はあっても、惲敬の古文の価値は認めていたのである。

桐城三祖について、惲敬は前出「上曹儷笙侍郎書」において「後に同州の張皐文、吳仲倫、桐城の王悔生と遊び、始めて姚姬傳の學の劉海峰より出でて、劉海峰の學の方望溪より出づるを知る。三人の文を求めて之れを觀るに及んで、又た未だ以て其の心の云はんと欲する所の者に鑿くるに足らず(後與同州張皐文、吳仲倫、桐城王悔生遊、始知姚姬傳之學出于劉海峰、劉海峰之學出于方望溪。及求三人之文觀之、又未足以鑿其心所欲云者)。」といい、桐城三祖の古文に対して物足りなさを感じている。この部分について、張舜徽『清人文集別錄』(中華書局、一九八〇年)卷十では、彼の古文が桐城三祖から入門したことはまちがいはなく、のちにそこから自立したと判断している。その点では、彼もまた桐城三祖の古文から影響を受けたといえるのである。

義法についても、彼自身は言及していないが、『合肥學舍札記』卷九「鄉黨義法」において、陸繼輅は「亡友の子居大令嘗て予に語りて曰く、論語鄉黨の一篇、義法最も精し(亡友子居大令嘗語りて曰く、論語鄉黨の一篇、義法最も精し)と云うて、惲敬もまた時に義法を用いることがあったようである。彼が古文の法に関心があったことは、『大雲山房文稿初集』卷首「大雲山房文稿通例」において、碑誌や書簡などにおける執筆方法を詳細に論じたことからわかる。つまり、惲敬は義法を用いることもあったが、ついには、独自に古文の法を確立したのである。その点では、文学主張でも、張氏がいうように、桐城三祖を出発点とし、後に自立したと見ることができよう。

最後に陸繼輅を取り上げる。彼は張惠言や惲敬と親しいだけでなく、姚鼐の弟子とも広く交遊があった。吳德旋とも一緒に『七家文



鈔』を編んでおり、ふたりが親しい関係にあったことがわかる。桐城三祖について、彼は「刪定望溪先生文序」（『崇正齋初集』巻十四）で「以らく聖清儒術の盛んなるは、一百七十餘年の間あれども、之れを爲りて工なる者は、方苞、劉大櫟、姚鼐、張惠言、惲敬の數人なるのみと（以聖清儒術之盛、一百七十餘年之間、爲之而工者、方苞、劉大櫟、姚鼐、張惠言、惲敬數人而已）」といっており、桐城三祖と張惠言、惲敬の五人を並べている。この五人を並べるのは、吳德旋の「七家文鈔後序」と同じであり、彼らを別格と見なしていたことがわかる。また、桐城三祖の文学主張については、彼は『合肥學舎札記』巻十一「三國志義法」で「史記已下、三國志の序事、最も義法有り（史記已下、三國志序事、最有義法）」といっており、古文の法として義法を用いて論評していた。このように、彼は桐城三祖の古文を尊重するだけでなく、義法を用いて文章を論じており、その文学主張は、姚門に近いことがわかるのである。

本章では、「陽湖派古文家」のうち、李兆洛、惲敬、陸繼輅について、姚門との交流と桐城三祖に対する態度を見てきた。陸繼輅は、古文の法として義法を受容し、姚門と密接な関係にあった。この点では、姚鼐の弟子と大きな違いはない。また、李兆洛や惲敬も、姚門への対抗意識は、ほとんど見られない。ここからは、当時において、陽湖派を標榜した事実は確認できず、後世いわれるように、彼らが桐城派に対抗することをめざしたわけではないのである。

#### 四、張惠言師弟と桐城三祖

「陽湖派古文家」のうち姚門と最も近い主張を持つのが、張惠言と董士錫の師弟である。彼らは、自分たちを方苞、劉大櫟の後継者と見なしていた。そこで、本章では、彼らの桐城三祖に対する態度と義法

の受容について見ていくことにする。

張惠言は、若いころ辭賦の執筆に励んだが、三十歳を前にして、古文に関心を向けるようになる。「送錢魯斯序」（『茗柯文二編』巻下）には、古文にとりくむようになった理由が示されている。

乾隆戊申、歙州より歸り、魯斯を過りて之れを示す。魯斯大ひに喜びて、顧みて余に謂ふに、吾れ嘗て古文の法を桐城の劉海峰先生より受くるも、顧だ未だ以て爲る暇あらざれば、子儻は之れを爲らんかと。余愧じて未だ能はざるを謝す。已にして余京師に遊べば、魯斯の言を思ひて、乃ち盡く曩時に習ふ所の詩賦若び書を屏け置きて爲らずして、古文を爲る。三年にして乃ち稍稍之れを得<sup>十一</sup>。

ここでは、彼が古文に傾注したのは、劉大櫟の弟子である錢伯坻の影響であるという。錢伯坻からは詩や書も学んだが、ものにならず、古文だけが三年の研鑽を経て、習得することができた。そのあいだには、彼は京師で吳德旋らと親しく交わっている。そのなかでも、特に強い影響を受けたのが、王灼であった。張惠言は「文稿自序」（『茗柯文三編』巻一）で「余の友の王悔生、余の黄山賦を見て之れを善みし、余に古文を爲ることを勧め、余に語るに其の師の劉海峰より受くる所の者を以てす。之れを爲ること一二年、稍稍規矩を得（余友王悔生、見余黄山賦而善之、勸余爲古文、語余以所受其師劉海峰者。爲之二三年、稍稍得規矩。）」といい、王灼からも劉大櫟の教えを聞いたとす。彼は、錢伯坻と王灼が劉大櫟の弟子であることに言及することで、自身の古文が、劉大櫟の影響を受けていることを認めたのである。

張惠言の場合、姚鼐師弟との交遊は、ほとんど確認できない。彼が

世を去つた嘉慶七年(一八〇二)は、姚門はまだ形成されていない。吳徳旋だけが、姚鼐に師事する前に彼と交遊を結んでいる。ふたりが桐城三祖をどう評価していたかは、「内自訟齋文稿序」(『初月樓遺編』卷一)において、吳徳旋が次のようにいつている。

曩者、徳旋 古文の法を張編修臯文に問ふ。編修以爲らく、我が朝 古文を能くするに名ある者は十を以て數ふれども、然れども首めに方侍郎望溪を推し、之れを繼ぐ者は、劉博士海峰、姚刑部惜抱なり。是れ故近日の古文の學は桐城に在りと。徳旋因りて求め三家の文を得て之れを讀めば、則ち望溪 其の學を以てし、海峰 其の才を以てし、惜抱の才は望溪より優り、學は海峰より勝りて、尤も私心の向慕する所と爲る<sup>十二</sup>。

古文の法を尋ねた質問に対し、張惠言は桐城三祖の古文を推奨する。さらに、古文の學は桐城にありともいつており、彼が桐城三祖の文學主張も尊重していることがわかる。吳徳旋は、その評価を聞いて、桐城三祖のうち、とりわけ姚鼐の古文を信奉するようになっていく。つまり、彼は姚門の同調者として、吳徳旋が姚鼐に師事するきっかけを与えたのである。

張惠言は、常州文壇の流行も一変させている。「復耶溪書二」(『初月樓文續鈔』卷二)によれば、吳徳旋の二十代、常州では侯方域、魏禧、汪琬、姜宸英だけでなく、董以寧、邵長蘅を高く評価し、方苞や劉大櫟は、齒牙にもかけられなかったという。その後「臯文 王悔生に交はりてより後、古文の學の桐城に在るを知る。數十年來、學者稍稍稱説して、望溪、海峰、惜抱の三先生、能く古人を學びて其の正を得ると爲すと(自臯文交王悔生而後、知古文之學在桐城。數十年來、學者稍稍稱説、望溪、海峰、惜抱三先生、爲能學古人而得其正)。」と

いうように、張惠言と王灼との交遊をきっかけとして、常州でも、桐城三祖が古文の正統を得ていると見なされるようになった。また、前出「與沈問亭書」では、彼の推挽によつて、吳徳旋が常州文壇で高い評価を得たという。このように、吳徳旋が評価されたのも、張惠言の力で、文壇の流行が変化したからだといえる。つまり、彼は、常州における桐城三祖の再評価の中心的存在だったのである。

張惠言は、みずからの古文の法を具体的に説明していない。ただし、「書劉海峰文集後」(『茗柯文補編』卷上)には、王灼が彼に伝えたのは、方苞と劉大櫟の古文であると見える。したがって、彼の古文の法は、このふたりの文學主張に基づくものであったと考えられる。ここでは、劉大櫟に対する評価として、莊子や司馬遷の境地には及ばないものの、唐宋八家の境地には時に到達することもあり、歸有光の境地には常に到達しているとする。その上で、王灼のことを引用する。

明甫の言に曰く、海峰 經を治むるの功は望溪に半ばするも、其の文必ず倍にして望溪に勝れり。然らば則ち海峰之れを爲るも焉こに至らざる者は、果して世の遠邇に繋からんやと。明甫又た言ふに、海峰 古文を爲ること既に成りて、乃ち籍を著きて望溪の弟子と爲ると。嗚呼、兩人故より相ひ先後を爲さんか<sup>十三</sup>。

王灼は、劉大櫟の經學は方苞に及ばないが、古文に関しては方苞に倍するといひ、その古文が完成してから、師事したとする。張惠言がこのことばを引用したのは、劉大櫟の古文が方苞に勝り、その古文は、方苞からそれほど影響を受けていないといいたかつたからである。つまり、彼は方苞より劉大櫟を高く評価するが、ふたりの師承をそれほど重視していない。この評価は、方苞からの師承ではなく、劉大

櫛の資質に重点を置いており、師承を重視する姚鼐と、微妙に態度が違っていたのである。

張惠言の古文の法は、その弟子たちへと伝えられた。まず、張惠言の弟である張琦を取り上げる。彼は兄から古文の法を学んだが、その法について、「答趙乾甫書」(『宛鄰文』卷二)では「夫れ百工の技藝、必ず規矩を以てすれば、況んや詩文をや。體格と曰ひ、章と曰ひ、句と曰ひ、字と曰ふは、所謂法なり。然りと雖も此れ文の粗迹なり(夫百工技藝、必以規矩、況詩文乎。曰體格、曰章、曰句、曰字、所謂法也。雖然此文之粗迹也)。」<sup>13</sup>といひ、文章全体から、字句にいたるまで、あらゆる段階において法があることを認めている。ここでは、古文の法とはなにか具体的に示されていない。ただし、彼が古文において法を重視した姿勢はうかがえ、その点では、兄と共通する態度が読みとれるのである。

次に董士錫を見ていく。彼は舅氏の張惠言兄弟から、古文の法を学んだ。彼の「重贈吳山子敘」(『齊物論齋文集』卷二)では、張惠言が方苞と劉大櫛を尊重したことに言及している。ここから、師の教えの淵源が、このふたりにあると考えていたことがわかる。それだけでなく、「亦有生齋文集敘」(『齊物論齋文集』卷二)には「易に言に物有りと曰ひ、又た言に敘有りと曰ふ。夫れ心に悶<sup>14</sup>ざすこと容れざる者有れば、發して言と爲る。言に紊ること容れざる者有れば、次ぎて文と成る(易曰言有物、又曰言有敘、夫心有不容闕者、發而爲言。言有不容紊者、次而成文)。」<sup>15</sup>といひ、義法の定義に言及している。この後で、彼は魏禧を「有物」の言とし、方苞を「有敘」の言と評して、このふたりを古文作者として最も尊重している。ここでは、義法の定義を使って、方苞を高く評価しており、彼の古文の法が、義法を基礎としたものであったことがわかるのである。

先に見た吳育もまた「私艾齋文集自序」(『私艾齋文集』卷首)にお

いて、董士錫が方苞を尊重したことに言及している。ここでは「晉卿余に問ふに爲る所の者を以てし、向に爲る所の詩文を見ず。乃ち語るに其の師の張臯文先生より受くる所の者を以てし、且つ之れを方望溪集に與して以て歸す(晉卿問余以所爲者、見向所爲詩文。乃語以所受于其師張臯文先生者、且與之方望溪集以歸)。」<sup>16</sup>といひ、張惠言から受けた教えが方苞に帰趨するものであったとしている。つまり、董士錫が受けた教えは、方苞を基準としており、義法の重視も、その教えに含まれていたと考えられるのである。

張琦にも、吳徳旋との交遊が確認できるが、張惠言の弟子のなかでは、周凱が特に吳徳旋との関係が深い<sup>14</sup>。彼はまず惲敬を通して、張惠言に師事した。彼が義法を重んじていたことは、「答雨農舍人書」(『内自訟齋文集』卷八)や「答戴醇士贊善書」(『内自訟齋文集』卷十)などに見える。例えば、方苞の書に対して執筆した「書清芬遺墨卷後」(『内自訟齋文集』卷六)では、次のようにいう。

凱少くして古文を常州の張臯文、惲子居の兩先生より學ぶ。兩先生の學、桐城の劉海峰より出で、海峰先生より出づ。先生に左氏傳を口授し、史記、唐宋八家文を手披するもの有り。凱求めて善本を得、古文の義法を知れば、益ます先生の文に於いて六經を根柢とすること最も深しと爲すを歎ず<sup>15</sup>。

ここでも、古文の師承を概括し、張惠言と惲敬の古文は、方苞と劉大櫛にさかのぼるといふ。張惠言の弟子たちは、自分たちを方苞と劉大櫛の系譜に属すと見なしていた。つまり、姚門における桐城三祖の系譜以外に、方苞、劉大櫛、張惠言、惲敬の師承も存在したのである。また、周凱は義法の根本を理解するが、その義法重視も、張惠言らから受けた教えと考えられる。このように、張惠言師弟の文学主張

でも、義法が重要な地位を占めていたのである。

周凱は、後に吳徳旋にも教えを請うようになる。彼は「與吳仲倫先生書」(『内自訟齋文集』巻八)において、張惠言と惲敬の死後、自分は教えを受けられないため、古文に自信がないという。さらに『初月樓文鈔』を読む機会を得て、吳徳旋の古文が古作者の意を得て、姚鼐の文章の気を彷彿とさせるものがあると絶賛する。その上で、次のようにいう。

先生、二先生の友なり。身心に得る所の者を以て、著して文を爲りて、以て引掖し天下の後學を下す。凱故人の弟子なり。苟し得る所有りて、其の造るに因りて之れを進むれば、宜しく先生の棄てざる所なるべし。羈して海島に職とすれば、趨りて左右に侍ることを獲ず。今ま何ぞ幸ひにして駕を枉げて相ひ臨むことを得んや<sup>十六</sup>。

ここで、彼は吳徳旋に教えを請うが、その理由として、自分が旧友の弟子であることを強調している。彼にとって、吳徳旋は師の友人だからこそ、師と同じような教えを受けられると期待したのである。また、吳徳旋の文章を姚鼐になぞらえることから、彼もまたその古文を模範としていたことがわかる。つまり、張惠言の弟子にとって、師や惲敬と同じように、姚鼐の古文もまた尊重する対象だったのである。周凱の例は、張惠言の死後、その弟子たちが吳徳旋に教えを受けることを願ひ、その文学主張が姚門とさらに近づく傾向にあったことを示しているのである。

その後、周凱は廈門、臺灣などで、古文を教えるようになった。「與泉永兵備道周公祠記」(『抑快軒文鈔』巻二)において、友人の高澍然が「公時に院に至り、諸生と講習す。諸生 院に住む者數十人あ

りて、弦歌絶えず。公兼ねて古文の義法を授くれば、是に於いて廈門に古文の學有り(公時至院、與諸生講習。諸生住院者數十人、弦歌不絶。公兼授古文義法、於是廈門有古文之學)。」というように、廈門書院において、周凱は義法を当地の学生に教えた。彼は張惠言、惲敬、吳徳旋から教えを受け、義法を福建に伝える役割を果たしたのである。これまで、桐城派の形成において、周凱の役割は重視されてこなかった。しかし、姚門以外にも、彼のように、桐城三祖の文学主張を各地に伝えた者も存在したのである。

ここまで、張惠言師弟の文学主張について論じてきた。張惠言は方苞と劉大櫟の古文を尊重する点で、姚鼐に同調する立場にあった。その弟子もまた師と同様に、義法を重んじていた。ここからは、張惠言師弟が主張する古文の法が、義法を基礎としていたことがわかる。これまでの論考では、義法の継承について、姚門だけに注目してきた。今回見たように、張惠言師弟もまた姚門に劣らず、義法を重視していたのである。したがって、張惠言師弟に限って言えば、彼らを独立した文学流派と見なさず、桐城派に含める方が適当だと考えられる。

張惠言師弟や陸繼輅らは、桐城三祖の古文を尊重する点では、姚門の同調者であったが、前出「歐陽生文集序」では、彼らに対する言及はない。曾國藩は、桐城派の系譜を姚鼐の弟子に限定している。姚門においては、姚鼐に対する絶対的な尊崇があった。そのため、張惠言師弟のような桐城三祖の同調者は、その系譜から排除されたのである。ただし、姚鼐の弟子のなかでも、吳徳旋のように、張惠言、惲敬を桐城三祖と並べて評価するものもいた。さらに、彼は姚門に属しながら、陽湖派作者と目されることもある<sup>十七</sup>。つまり、吳徳旋が仲介することで、周凱ら張惠言の弟子は、いっそう姚門に近づき、姚門という垣根を越えて、桐城派の教えが拡大することになったのである。

## 五、江浙における吳徳旋の影響

吳徳旋は江浙一帯を中心に活動し、姚鼐の教えを伝えていった。ここまで、姚鼐師弟や張惠言、惲敬らとの交遊に注目したが、それ以外にも、彼は多くの弟子を持ち、江南の知識人にも大きな影響を与えた。そこで、本章では、彼がこの一帯でどのような影響力を持っていたかを論じていく。

すでに言及したように、曾國藩は、吳徳旋と呂璜が桐城派形成に果たした役割を認めている。そこで、まず呂璜との交遊について見ていくことにする。『月滄文集』巻首「年譜」によれば、道光八年（一八二八）、彼は吳徳旋に師事を願い出て、翌年には、杭州で二十日以上にわたって義法について語りあったという。このときの教えが、後に『初月樓古文緒論』にまとめられた。ここでは、義法だけでなく、清代の古文作者を多く取り上げている<sup>十八</sup>。このような経緯で、呂璜は吳徳旋に師事したが、彼には、それ以外にも姚鼐の弟子との交遊が確認できる。

彼が吳徳旋に師事したのは、実は姚椿をきっかけとしている。前出「吳仲倫先生墓誌銘（并序）」には「既にして君を莊舎人仲方の所に識る。會たま呂郡丞璜 古文の義法を予に問ふも、予將に遠行せんとすれば、乃ち君を以て對ふ。其の後璜の君と遊ぶこと甚だ歡たり（既而識君於莊舎人仲方所。會呂郡丞璜問古文義法於予、予將遠行、乃以君對。其後璜與君游甚歡。）」と見え、もともと呂璜は姚椿に義法を尋ねていた。姚椿が仲介して、彼は吳徳旋に師事することになったのである。ここからは、杭州周辺において、姚鼐の弟子たちが義法を喧伝したため、呂璜のような同調者を生んでいたことがうかがわれる。

呂璜は、当時浙江にいた姚鼐の弟子たちとも交流があった。その弟子とは、姚椿、李宗傳、毛嶽生らである。姚椿には「有守一首贈呂月滄」（『晚學齋文集』巻五）があるように、呂璜と文学的交流があっ

た。また、李宗傳にも「呂禮北書」「復呂禮北書」（ともに『寄鴻堂文集』巻一）など、彼あての書簡がある。ほかにも「陳美初文集序」（『寄鴻堂文集』巻二）において、李宗傳は呂璜の文才を高く評価し、たがいに文章を見せてあったという。さらに、毛嶽生もまた「與呂月滄書」（『休復居文集』巻三）において、その人となりと文章を賞賛する。吳徳旋だけでなく、彼らからも、呂璜が影響を受けていたことがわかる。

一方、呂璜の側からは、『月滄文集』巻二に、李宗傳あて書簡が二通、毛嶽生あてが三通、吳徳旋あてが二通収録されている。例えば、『答毛生甫書』（『月滄文集』巻二）に「師承 近日に在りて、惟だ桐城もて正と爲す。之れに由りて光益かがます爛かげば、則ち務めて其の膏を加ふるのみ（師承在近日、惟桐城爲正。由之而光益爛焉、則務加其膏爾。）」とあるように、彼は桐城の学を正統としている。曾國藩の「歐陽生文集序」以降、吳徳旋との師弟関係だけが注目されてきた。しかしながら、その背景には、呂璜と複数の姚鼐の弟子による文学的交流が存在し、吳徳旋への師事は、その顕著な例にすぎないと考えられるのである。

当時、浙江における知識人の交遊は、「國朝文錄校勘題名」（『國朝文錄』巻首）から、その範囲をうかがうことができる。姚椿の『國朝文錄』は、清代の古文を広く収録しているが、その編纂過程については、次のようにいわれている。

初め是の錄を選ぶに、宜興の吳仲倫（徳旋）、鎮洋の彭甘亭（兆蓀）、長洲の王惕甫（苜蓿）、永福の呂月滄（璜）、桐城の李海帆（宗傳）、寶山の毛生甫（嶽生）、華陽の汪少海（仲洋）の輩有りて、其の出入を討論す<sup>十九</sup>。

ここには、吳徳旋らとの議論を経て、収録する作品を選定したことが示されている。そのなかには、李宗傳や毛嶽生のような、姚鼐の弟子も含んでいるし、王芑孫や呂璜のような、姚門の周辺に位置する人々もいた。ここからは、姚門に限らず、吳徳旋ら江南の知識人が、広く文学的交流をしていたことがわかる。呂璜との師弟関係も、こうした交流を土壌として生まれたと考えられるのである。

このほかに、呂璜は陳用光とも交遊があった。呂璜の書簡には「上陳碩士先生書」「答陳碩士先生書」(ともに『月滄文集』卷二)があり、陳用光の書簡には「再與呂禮北書」(『太乙舟文集』卷五)がある。このうち、「再與呂禮北書」には、姚門内における正統意識をかいま見ることができ、先に見たように、吳徳旋、姚椿、毛嶽生は、私淑の弟子に位置づけられることもあった。この書簡では、陳用光は、古文の学は桐城だけが正統であることを強調した上で、次のようにいう。

姫傳先生の門人、管異之同、梅葛君曾亮有りて、皆な深く造りて得るもの有ること用光より勝れり。惜むらくは異之今年の秋、病歿せり。葛君は則ち年齒甚だ壯にして、精進すること未だ量るべからず。此の數君子の業、王惕甫、張臯聞、吳仲倫と、相ひ上下せず<sup>二一</sup>。

王芑孫、張惠言、吳徳旋の名を挙げたのは、呂璜が尊重しているからだと考えられる。それに対し、ここでは、管同と梅曾亮はこの三人と甲乙つけがたいという。このように、管同や梅曾亮と対比したのは、吳徳旋を姚門の中心と見なさず、王芑孫や張惠言と同じ、文壇の名士と位置づけているからである。すでに見たように、吳徳旋は、陳用光の幕僚となり、彼に対して同門意識を示していた。しかし、ここ

では、管同や梅曾亮の文章を称揚する姿勢を示されている。吳徳旋は、姚門の外の呂璜からは、姚鼐の弟子と見なされ、内の陳用光からは、私淑の弟子と目されていた。ここから、彼が姚門の外縁に位置していたことがわかるのである。

そのような吳徳旋のもとに集まったのが、多くの弟子である。『桐城文學淵源考』卷六は、吳徳旋と姚椿の弟子を収録するが、次に、主な吳徳旋の弟子を取り上げ、彼を中心としたグループについて論じていく。

吳徳旋の文集には、程德賚、王國棟、吳敬承、吳鋌など、弟子にあつた書簡が収録されている<sup>二二</sup>。また、程德賚『子香續鈔』にも、王國棟、吳敬承、吳鋌にあつた書簡がある<sup>二三</sup>。これらの書簡では、唐宋八家や桐城三祖および張惠言、惲敬などの作品を議論しており、吳徳旋師弟は書簡を通じて、たがいに文学主張を披露していたことがわかる。

『初月樓古文緒論』は、呂璜が受けた吳徳旋の教えを記している。ほかにも、吳鋌『文翼』にも、吳徳旋からの影響を見ることができ、例えば、『文翼』には、師の主張を多数収録しているが、吳鋌自身も「震川 文を論ずるに氣韻を以てし、望溪 文を論ずるに義法を以てし、惜抱 文を論ずるに妙悟を以てし、才甫 文を論ずるに音節を以てし、子居 文を論ずるに骨力を以てす(震川論文以氣韻、望溪論文以義法、惜抱論文以妙悟、才甫論文以音節、子居論文以骨力)。」(『文翼』卷一)といい、歸有光以降の作者の文学主張を論じている。第一章で見たように、吳徳旋は師から高遠な境地を学び、古文について悟るものがあつた。ここで、姚鼐の文学主張を「妙悟」とするのは、吳徳旋からの影響と見られる。また、惲敬を桐城三祖と並べており、吳鋌もまた桐城三祖と惲敬を同じように尊崇する立場にあつたことがわかる。このような見方は、張惠言師弟や陸繼略らの文学主張と

もほぼ同じである。吳徳旋が姚門の外縁に位置したからこそ、弟子たちも桐城三祖と張惠言、惲敬とともに尊重する態度をとるようになったと考えられるのである。

最後に、吳徳旋の影響を示す例として、鄭喬遷を取り上げる。吳徳旋は『藏密廬文稿』巻首の序において、「仰高顧だ欲然として自らを足れりとせずして、予に就きて益を求む。意殷殷として一再に至りて請ひて未だ已まず。予因りて之れに告ぐるに姚刑部姫傳、張編修阜文より受くる所の説を以てす（仰高顧欲然不自足、而就予求益焉。意殷殷至一再請而未已。予因告之以所受於姚刑部姫傳、張編修阜文之説）。」<sup>1)</sup>とっており、鄭喬遷に姚鼐と張惠言の教えを伝えたと言明している。ここから、吳徳旋は姚鼐への師事した後も、張惠言から受けた教えを放棄したわけではないことがわかる。彼は姚鼐と張惠言の教えを、相互に補充する関係にあると考えていたのである。そのことは、前章で見たように、張惠言の弟子である周凱が、吳徳旋に教えを受けようとしたことにも示されている。その教えが姚鼐と張惠言を尊重し、門戸の見にとらわれなかったからこそ、姚門以外の江南の知識人からも支持されやすくなったと考えられるのである。

鄭喬遷は、吳徳旋の教えを信奉するようになったが、「與陸祁孫書」<sup>2)</sup>『藏密廬文稿』巻二には、納得できない部分も一部あったことが見える。吳徳旋の教えについて、彼は陸繼輅に次のように尋ねる。

惟だ専ら姫傳を信じ、以て望溪を尊ぶは、區區の心、未だ能く釋然とせざる者有り。本朝の古人の文に學ぶ者は、一家のみならず。其の間 純有り駁有りと雖も、或ひは大醇にして小疵ある者有らん。望溪 本朝の諸大家の中に於いて、固より醇なりと稱せらる。而れども難に遭ひてより以後、一字も著さず。心を専らにして以て之れを師とすれば、恐らく空疎の弊を啓き易くならん。

或ひは諛聞纂學の得て知る所に非ざるならん。<sup>113)</sup>

ここでは、方苞に対する評価が問題となっている。彼は方苞が大家であることは認めても、文字の獄以後、きちんとした文章を執筆しておらず、模範にできないという。ここからは、方苞に対する批判が、江南では依然として存在していたことがわかる。鄭喬遷が陸繼輅に尋ねたのは、彼を吳徳旋の同調者だったからである。これまで、桐城派の系譜では、こうした姚門を越えた文学交流に注目してこなかった。吳徳旋の場合、弟子に教えるだけでなく、江南に同調者を増やしていった。その結果として、姚門の枠を越えて、桐城派が江南にも根づくことになったのである。

本章では、吳徳旋の教えが、江南知識人に与えた影響を見てきた。呂璜の例からわかるように、吳徳旋らは、広く文学的交流をすることで、その主張にも一定の合意を得るようになった。彼の周辺では、張惠言や惲敬も桐城三祖の同調者として尊重しており、姚門以外の知識人にも受け入れやすい状況にあった。一方で、彼は姚鼐の教えを継承する弟子として、彼らから尊敬を集めていた。その結果、彼は諸生でありながら、多くの弟子を得ることができたのである。

### おわりに

本稿では、吳徳旋を中心とした交遊に注目し、江南における桐城派拡大について論じてきた。姚門が形成された時期には、張惠言をはじめとして、多くの知識人が、方苞や劉大櫆の古文を尊重していた。彼らは姚鼐に師事したわけではなかったが、姚門の同調者といえる。これまでの論考は、桐城三祖の系譜だけに注目してきたため、こうした同調者に言及しない傾向がある。しかしながら、姚門の周囲に同調者

がいたことは、後に桐城派が広く拡大する重要な要素になったと考えられるのである。

吳德旋は、姚鼐に心酔し、自身を師の真伝を得ていると自負していた。また、その弟子とも広く交遊し、彼らに対して同門意識を持っていた。一方で、私淑の弟子と見なされることもあったように、彼は姚門の中心に位置していたわけではない。彼自身も、若いころ張惠言や惲敬とも古文を研鑽したため、桐城三祖に加えて、彼らの古文も尊重している。このように、門戸の見にとられない態度は、姚門以外の知識人にとって、受け入れやすいものであった。そのため、周凱のように、張惠言と惲敬の死後に、彼に師事を願い出る弟子も出てきたのである。その結果、桐城三祖を重んじる教えは、江南一帯に拡大することができたのである。

清代において、桐城派がほかの文学流派と異なる点は、地域を大きく越えて、信奉者を集めたことにある。例えば、陽湖派や湘郷派などでは、ほぼ地縁と師承に基づき、ひとつの流派としてまとめられている。桐城派だけが、桐城出身者や姚門に限定されずに、広く展開していった。このような急速な拡大には、同調者の存在が大きな意味を持つ。吳德旋は姚鼐の弟子であるだけでなく、桐城三祖の同調者に対しても影響力を持っており、江南における桐城派の重要な核となったのである。

一 拙稿「方東樹師弟の桐城派形成に果たした役割」(『金城学院大学論集(人文科学編)』第十一卷一号、二〇一五年)は、方東樹師弟の桐城における学術活動を考察し、同「姚鼐における桐城派への所属意識」(『金城学院大学論集(人文科学編)』第十一卷二号、二〇一五年)は、桐城出身の姚鼐が、京師と桐城のふたつのグループを結びつけようとしたことを明らかにした。

二 吳德旋の江浙への影響については、柳春蕊『晚清古文研究 以陳用光、梅曾亮、曾國藩、吳汝綸四大古文圈子爲中心』(百花洲文藝出版社、二〇〇七年)第一章のほかに、汪長林、嚴澤燕「吳德旋與江浙地區桐城派的傳衍」(『安慶師範學院學報(社會科學版)』第三十四卷第二期、二〇一五年)などで論じられる。どちらも、吳德旋師弟や陽湖派との関係に注目する。

三「姚鼐頓首、仲倫先生足下。鼐才陋識闇、無得於古人之學、而士大夫徒以故舊之好與之。遂橫竊虛譽、甚可愧恥。今先生又過聽而推及之、至比之歐陽永叔、是重益其愧而使之不知所爲答者也。伏讀賜示文集、理當而格峻、氣清而辭雅、今之世固未有其比。先生所希者退之也。以學退之者較之、蓋與李習之、持正並、不待言矣。」

四「先生誨之曰、子之論文主於法、是矣。然此學者之始事也。其終也、幾且不知有法、而未始戾乎法。子其歸而求之周秦諸子及司馬子長之書乎。德旋曰唯唯然、固且疑之。疑夫惜抱先生之文之謹於法也。然先生固嘗言之曰、文之至者、通於造化之自然、人力不得而施也、則言夫人力之所可爲者、亦惟學者之始事而已。」

五「至先生是編、始述性道之說、後乃推而廣之、則凡經傳訓詁、稗史雜記、故事遺聞、與夫時賢之撰述、靡不該錄、以備遺忘遺暇日。使後之學者、各因性情之所近而資取焉、則咸可以有助也。」

六「道光十三年、客吾友姚君石甫武進官廨。武進有文家曰張君臯聞、已前死不及見、識寶山毛君生甫、宜興吳君仲倫、吳江吳君山子。三子之文不同、要之、與臯聞相上下。」



七 兩派の関係については、『陽湖文派研究』第七章で分析しているほか、萬陸「陽湖、桐城文派歧異釋」(『江淮文壇』一九八四年第二期)、任訪秋「渾敬的古文論及與桐城派的關係」(『文學遺產』一九八四年第三期)、汪龍麟「20世紀陽湖派研究述評」(『通化師範學院學報(社會科學)』一九九九年第一期)、朱達明「陽湖派與桐城派的異同」(『常州工學院學報』第十五卷第二期、二〇〇二年)などで論じられている。一方で、姜書閣「桐城文派評述」(商務印書館、一九三〇年)第三章以来、陽湖派を独立した流派として扱わない立場も根強くある。

八「又書貨殖傳後」(『望溪先生文集』卷二)において、方苞は「義は即ち易の所謂言に物有るものなり、法は即ち易の所謂言に序有るものなり。義は以て經と爲して法は之れを緯とすれば、然る後に成體の文と爲る(義即易之所謂言有物也、法即易之所謂言有序也。義以爲經而法緯之、然後爲成體之文。）」といい、義法を定義している。この「言有物」「言有序」は、後に義法の代名詞としても用いられるようになった。

九「編脩既歿之、後憚大令子居、大肆力于文章。其論文也、自歐陽水叔而下、均有貶詞。以德旋爲若可登文章之錄者而亦得幸、與所貶之列、曰才弱。大令之言又吾郡士人所取信也。故比時毀德旋之文者亦十六七。」

十 陸繼輅と姚門の交遊については、劉開と「桐城道中哭孟塗」(『崇百藥齋三集』卷一)などで、管同と「異之寒燈課讀圖」(『崇百藥齋三集』卷五)などで、陳用光と「消寒一集賓谷先生招同春湖副憲、石士學士、南雅編修、雪樵檢討、心壺侍御、蘭雪星伯若孫詩餘四舍人、孟慈員外、子芬伯游兩茂才、分賦近畿古蹟、得華陽臺」(『崇百藥齋三集』卷三)などで、鄧廷楨と「阻風遣悶寄嶠筠先生」(『崇百藥齋三集』卷三)などで確認できる。ほかの弟子にも、郭慶と「和頰伽見懷次來韻」(『崇百藥齋續集』卷一)などで、馬瑞辰と「答同年馬水部(瑞辰)」(『崇百藥齋續集』卷一)などで、李宗傳と「李觀察(宗傳)海上釣鼈圖」(『崇百藥齋三集』卷六)などで、交遊が確認でき、姚門と密接な交流があった。

十一「乾隆戊申、自歙州歸、過魯斯而示之。魯斯大喜、顧而謂余、吾嘗受古文法於桐城劉海峰先生、顧未暇以爲、子儻爲之乎。余愧謝未能。已而余游京師、思魯斯言、乃盡屏置曩時所習詩賦若書不爲、而爲古文。三年乃稍稍得之。」

十二「曩者、德旋問古文法於張編修臯文。編修以爲我朝名能古文者以十數、然首推方侍郎望溪、繼之者、劉博士海峰、姚刑部惜抱也。是故近日古文之學在桐城。德旋因求得三家文讀之、則望溪以其學、海峰以其才、惜抱才優于望溪、學勝于海峰、尤爲私心所向慕焉。」

十三「明甫之言曰、海峰治經功半於望溪、其文必倍勝於望溪、然則海峰爲之而不至焉者、果繫於世之遠邇耶。明甫又言、海峰爲古文既成、乃著籍爲望溪弟子。嗚呼、兩人故相爲先後哉。」

十四 吳德旋には、張琦あて「答張翰風書」、「與張翰風書」三通(ともに『初月樓文鈔』卷二)があり、張琦にも「答吳仲倫書」(『宛鄰文』卷一)などが確認できる。また、董士錫に対しては、「晉卿董君傳」(『初月樓文鈔』卷六)を執筆し、吳育については、「遵路鄒翁七十壽詩文序」(『初月樓文續鈔』卷四)において言及がある。

十五「凱少學古文於常州張臯文、惲子居兩先生。兩先生之學、出桐城劉海峰、海峰出於先生。先生有口授左氏傳、手披史記、唐宋八家文。凱求得善本、知古文義法、益歎先生之於文根柢六經爲最深。」

十六「先生、二先生之友也。以所得於身心者、著爲文、以引掖下天下後學。凱故人之弟子也。苟有所得、因其造而進之、宜先生所不棄。羈職海島、不獲趨侍左右。今何幸而得枉駕相臨耶。」

十七 陳光貽「陽湖派主要作者簡介」(『江淮論壇』一九八三年第一期)、『渾敬集』(中華書局、二〇一三年)所収の萬陸「前言」や俞樟華、胡吉省「桐城派編年」(人民文學出版社、二〇一五年)道光二十年の条では、吳德旋を陽湖派作者に含めている。

十八 桐城三祖および張惠言、渾敬以外に、『初月樓古文緒論』では、汪琬、

朱彝尊、黄宗羲、邱維屏、侯方域、魏禧、邵長蘅、李光地、儲欣、儲大文、王步青、方燦如、朱仕琇、王芑孫、秦瀛、袁枚、張士元、魯纘の名を挙げ  
る。

十九「初選是錄、有宜與吳仲倫(德旋)、鎮洋彭甘亭(兆蓀)、長洲王惕甫(芑孫)、永福呂月滄(璜)、桐城李海帆(宗傳)、寶山毛生甫(嶽生)、華陽汪少海(仲洋)輩、討論其出入。」

二十「姬傳先生之門人、有管異之同、梅葛君曾亮、皆深造有得勝於用光。惜異之今年秋、病歿矣。葛君則年齒甚壯、精進未可量。此數君子之業、與王惕甫、張臯聞、吳仲倫、不相上下。」

二十一 程德寶あてには、前出「與程子香論大雲山房文稿書」以外に、「與程子香書」(『初月樓文鈔』卷二)があり、王國棟あてには、前出「與王守靜論大雲山房文稿書」以外に、「復王守靜書」五通(ともに『初月樓文續鈔』卷二)がある。そのほかに、吳敬承あて「與族弟筠野書」(『初月樓文續鈔』卷二)、吳鋌あて「復耶溪書」二通(ともに『初月樓文續鈔』卷二)、「答耶溪書」「再與耶溪書」(ともに『初月樓遺編』卷一)など、弟子にあてた書簡が確認できる。

二十二『子香續鈔』卷二には、王國棟あて「與王守靜議友服書」二通、吳敬承あて「與吳筠野書」、吳鋌あて「與吳耶溪書」が収録されている。

二十三「惟專信姬傳、以尊望溪、區區之心、有未能釋然者。本朝學古人之文者、不一家。雖其間有純有駁、或有大醇而小疵者。望溪於本朝諸大家中、固稱醇矣。而自遭難以後、不著一字。專心以師之、恐易啓空疎之弊也。或非諛聞寡學之所得知也。」